The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	キリシタン版国字本の本語表記における「え」「ゑ」の用法
Author(s)	岸本, 恵実
Citation	日本語・日本文化. 2001, 27, p. 71-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8640
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜研究論文＞

キリシタン版国字本の本語表記における「え」「ゑ」の用法

岸本　恵実

1．はじめに

16～17世紀の日本におけるキリスト教の布教では、教義に関する重要な概念は、誤解を避けるために訳語を用いないでポルトガル語やラテン語のまま用いる原語主義を採用した。この方針にしたがって、日本語で書かれたキリシタン版の書物では、Deus（神）、Crus（十字架）、Fides（信仰）など多くの原語が用いられている。これらを本稿では、大塚（1954）の「キリシタン版国語書中に用いられている外国語」という定義にしたがって、以下「本語」と呼ぶことにする。

でうすの御分別の内には御作の物は一つもなしといへどもそれ〳〵しよさうこもり玉ふ也其しよさうを本語に＋いであと云也

（1591年？刊国字本『どちりいなきりしたん』）

※下線は全て筆者による。以下の引用においても同じ。

本語は、ローマ字本においてはDeus，Ideaのようにもとの原語の綴りのまま頭文字を大文字にして用いているが、国字本の場合はふつう「でうす」「いであ」のように仮名で表記している[1)]。

キリシタン版国字本全体を通して、原語のEに対する母音表記には「え」（字母「衣」）と「ゑ」（字母「恵」）の二種類の仮名の活字が用いられており[2)]、この他の変体仮名やいわゆるハ行転呼音の「へ」は用いられていない。前期版『どちりいなきりしたん』・後期版『どちりなきりしたん』の二種類の国字本が現存するキリシタン版ドチリナ・キリシタンを中心に、本語表記においてこの「え」「ゑ」がどのように用いられているかを明らかにし、また他の仮名の表記も参考にしながらその使い分けの理由を考察するのが本稿の目的である。なお、キリシタン版国字本には写本もいくつか現存するが、今回対象範囲は版本のみとし写本

は扱わないことにする。

ドチリナ・キリシタンは、キリシタン版として4種類（1591年？刊国字本、1592年刊ローマ字本、1600年刊ローマ字本、1600年刊国字本）が現存し、前期版（ローマ字本・国字本）と改訂を経た後期版（ローマ字本・国字本）とに大きく分けることができる。ドチリナ・キリシタンは、キリシタン書の中で最も重要視されていたと思われる基本教義書であること、キリシタン版の中で前期版・後期版の二種類の国字本が現存するのはこの資料が唯一であることから、キリシタンの本語表記の傾向を知るためにまずこの資料を取り上げる。なお、以下本稿では前期版国字本『どちりいなきりしたん』を「前期版（どちりな）」、後期版国字本『どちりなきりしたん』を「後期版（どちりな）」と略称する。

前期版から後期版への改訂については亀井・チースリク・小島（1983）に詳細な調査報告があり、文章の補筆・削除をはじめ、用語、表記などに多くの手入れがあることが明らかにされている。この改訂において、本語の表記も改められたところがあるが、これを亀井・チースリク・小島（1983:64-65）は次の四つにまとめている。

1　語尾の「あ」を「や」としたこと
2　語頭の表記について、「ゐ、え、を」をそれぞれ「い、ゑ、お」としたこと
3　語中の「ゑ」を「え」にしたこと
4　長呼音の表記を廃したこと

本稿では、このうち2・3の「え」「ゑ」の改訂の問題を取り上げてその使い分けを考察し、他の国字本の場合や、「い」「ゐ」と「お」「を」の改訂についても言及したい。

2．国字本どちりなの本語における「え」「ゑ」

2．1　改訂の様相

前期版と後期版の「え」「ゑ」を含む本語の用例は以下の通りである。

	「え」を含む語	「ゑ」を含む語	計
前期版	えうかりすちや(2) (計2)	がびりゑる(1)、けれゑど(1)、こんしゑんしや(2)、さひゑんしや(1)、しゑんしあ(1)、どんゑす(1)、はしゑんしや(1)、ほろへゑた(3)、ゑ(1)、ゑうかりすちや(9)、ゑけれじや(52)、ゑご(1)、ゑすてれまうんさん(3)、ゑすへらんさ(4)、ゑつ(6)、ゑわ(1)、ゑんてんじめんと(5)(計93)	95
後期版	こんしえんしや(2)、さぴえんしや(1)、しえんしや(1)、はしえんしや(1)、ぴえだで(1)、ぽろへえた(2)(計8)	がびりゑる(1)、ゑうかりすちや(13)、ゑけれじや(70)、ゑご(1)、ゑすてれまうんさん(3)、ゑすぺらんさ(4)、ゑつ(6)、ゑは(1)、ゑんてんぢめんと(5)(計104)	112
計	10	197	207

(1)「えうかりすちあ」「えうかりすちや」など「え」「ゑ」と関係のない表記のゆれがあるものは、後期版の表記に統一し、用例数もひとつにまとめた。
(2)一語一音節の「ゑ」は語頭の例に入れた。

前期版から後期版で表記が改められたのは以下の10例である。

〈語頭の「え」が「ゑ」に改められた例……2例〉

えうかりすちあ（49-ℓ.9）→ゑうかりすちや（32-ℓ.8）

えうかりすちや（50-ℓ.11）→ゑうかりすちや（35v-ℓ.10）

〈語中の「ゑ」が「え」に改められた例…8例〉

ほろへゑた（5v-ℓ.13，6-ℓ.3，6-ℓ.4）→ぽろへえた（5-ℓ.6，5-ℓ.8，5-ℓ.8）

こんしゑんしや（53-ℓ.13，53v-ℓ.2）→こんしえんしや（39v-ℓ.10，39v-ℓ.12）

はしゑんしや（58-ℓ.12）→はしえんしや（42-ℓ.3）

さひゑんしや（77-ℓ.11）→さぴえんしや（54v-ℓ.4）

しゑんしあ（77-ℓ.13）→しえんしや（54v-ℓ.12）

改訂後の後期版では、語頭に「え」が用いられた例は1例もなくなり、語頭は全て「ゑ」となっている。また、語中で「ゑ」を用いた例は「がびりゑる」1例のみとなり、語中では10例中9例で「え」を用いている。

2．2　音韻面からの考察

なぜ後期版では先のような表記の改訂が行われたのだろうか。ここでは、日本語または原語（主としてポルトガル語）の音韻的な違いが改訂の理由になった可能性が低いことを示したいと思う。

2．2．1　日本語の「え」「ゑ」の発音

日本語のア行のエとワ行のヱについては、鎌倉時代ごろから仮名遣に混乱が見られ、院政期以降は語中語尾の「へ」も含めて同音になっていたという見方が通説となっている[3)]。キリシタン版が出版された16世紀末から17世紀初めごろの国内文献での混同例は枚挙にいとまがない。

ち<u>え</u>くらへには参らん（文禄本幸若「笛巻」）

かの女は極めたる<u>ゑ</u>せものなりければ（古活字版『義経記』）

キリシタン資料でも、ローマ字ではア行のエとワ行のヱは等しくyeで書かれており、区別がない。また『落葉集』（1598年刊）本篇では、いろは順の「え」の部は空白とし、「ゑ」の部に一つにまとめている。したがって、「え」の振り仮名のある漢字「依」「衣」は「ゑ」の部に入っている。また、山田（1971）は『落葉集』に見られる「え」「ゑ」間の仮名遣のゆれを指摘している。

つく<u>え</u>・つく<u>ゑ</u>（案）（色葉字集）

<u>え</u>だ／<u>ゑ</u>だ（枝）（本篇／色葉字集）

これらのことから、キリシタン資料では「え」「ゑ」は同音Yeに対する、異なる種類の文字表記とみなされていたことがわかる。

このように、キリシタン資料以外の国内文献でも、またキリシタン資料自体でも日本語の発音に基づいた「え」「ゑ」の明らかな使い分けは見られない。したがって、キリシタン資料の編纂された当時の日本語の発音に後期版どちらなの改訂の理由を求めることは難しい。

2．2．2　原語Eの発音

「え」「ゑ」の仮名の使い分けが原語の発音の違いに対応していたという可能性もうすい。その理由を以下に述べる。

原語の多くはポルトガル語であるが、Eの文字の発音の違いとしては、強弱アクセントの有無と、Eの文字で表される発音［ɛ］［e］［ẽ］の違いがある。

ポルトガル語のアクセントの位置は、祖語であるラテン語の長短アクセントに由来するもので、16・17世紀ごろと現代とでは基本的に変わりがないため、現代語の発音をもとに、後期版どちらなに用いられているポルトガル語のアクセントの位置を示す[4)]。

※「え」「ゑ」には下線を引き、アクセントの位置は▒の網掛けで示す。

〈アクセントのあるE〉

国字本	ローマ字本	現代語の綴りと発音
しえんしや	Scientia	ciência [si'ẽsia]
ゑは	Eua	Eva ['eva]

この他、こんしえんしや、さびえんしや、はしえんしや、ぽろへえた

〈アクセントのないE〉

ぴえだで	Piedade	piedade [pie'dad(ʒ)i]
ゑうかりすちや	Eucharistia	eucaristia [eukaɾis't(ʃ)ia]

この他、ゑすてれまうんさん、ゑすぺらんさ、ゑんてんぢめんと

改訂を経た後期版において、「え」「ゑ」両方についてアクセントのあるE、アクセントのないEに対して用いられているため、アクセントの有無は「え」「ゑ」の使い分けとは関係がないといってよいようである。

また、ポルトガル語の母音Eの発音の種類に関していうと、これも原則的にラテン語の長短アクセントに由来している。池上（1984）によるとポルトガル語の母音の体系は16世紀半ばまでに現代語と同じになっていたと言われているので、やはり現代語の発音を参考にすることができよう。

〈[ɛ]〉

国字本	ローマ字本	現代語の綴りと発音
ぽろへえた	Propheta	profeta [pro'fɛta]
がびりゑる[5)]	Gabriel	Gabriel [gabri'ɛɾ]

〈[e]〉

ぴえだで	Piedade	piedade [pie'dad(ʒ)i]

ゑすぺらんさ　　Esperança　　esperança [espe'rẽsa;is-]

この他、ゑうかりすちや、ゑすてれまうんさん

〈[ẽ]〉

さぴえんしや　　Sapientia　　sapiência [sapi'ẽsia]

ゑんてんぢめんと　　Entendimento　　entendimento [ẽtẽd(ʒ)i'mẽtu;ĩ-]

この他、こんしえんしや、しえんしや、はしえんしや

このように、原語の［ɛ］［e］［ẽ］の発音に対して「え」「ゑ」それぞれが用いられており、発音の違いと対応しているとはいえない。

以上のことから、本語表記の「え」「ゑ」の違いは日本語や原語の発音の違いに基づくものと考えることは難しい。したがって、後期版どちりなにおける改訂は、発音とは無関係に、「ゑ」は語頭に「え」は語中語尾の位置に用いるという表記上の使い分けを明確にしたものと考えてよいだろう。

3．他のキリシタン版国字本の場合

後期版どちりなでみた本語における「え」「ゑ」二文字の使い分けは、他のキリシタン版国字本でも同様にみられる。現存するキリシタン版国字本のうち、本語を多く含む宗教書で、前期版・後期版どちりな以外にまとまった分量をもつ『ばうちずもの授けやう』（仮題、1592年頃刊）、『サルバトル・ムンヂ』（1598年刊）、『ぎやどぺかどる』（1599年刊）、『おらしよの翻訳』（1600年刊）、『こんてむつすむん地』（1610年刊）の五種類について調査した結果が以下の表である。

※「ゑけれじや」と「ゑけれしや」のように、「え」「ゑ」と関係のない表記のゆれは数の多い方に表記を統一し、用例数もひとつにまとめてある。

〈『ばうちずもの授けやう』〉

	「え」を含む語	「ゑ」を含む語	計
語　頭	（ナシ）	ゑけれじや（7）、ゑすきりつうら（2）（計9）	9
語中語尾	（ナシ）	こんしゑんしや（1）	1
計	0	10	10

〈『サルバトル・ムンヂ』〉

	「え」を含む語	「ゑ」を含む語	計
語　頭	（ナシ）	ゑけれぢや（7）、ゑすきりつうら（2）（計9）	9
語中語尾	こんしえんしや（1）	こんしゑんしや（2）	3
計	1	11	12

〈『ぎやどぺかどる』〉

	「え」を含む語	「ゑ」を含む語	計
語頭	（ナシ）	ゑうかりすちや（7）、ゑうぜびよ（6）、ゑけれじや（15）、ゑけれじやすちこ（26）、ゑじつと（15）、ゑすきりつうら（2）、ゑすこう（1）、ゑすていの（1）、ゑすつるちよ（1）、ゑすぺらんさ（2）、ゑぜきやす（2）、ゑぜきゑる（3）、ゑぞど（2）、ゑてるにだあで（2）、ゑのく（1）、ゑは（2）、ゑはらいん（1）、ゑはんぜりよ（20）、ゑはんぜりした（2）、ゑぴてと（1）、ゑへぞ（3）、ゑべれよす（3）、ゑみせの（4）、ゑりあの（1）、ゑりぜう（3）、ゑりやす（3）、ゑるくれす（1）、ゑんてんぢめんと（4）（計134）	134
語中語尾	こんしえんしや（17）、さぴえんしや（1）、しえんしや（1）、べえもつ（2）（計21）	あすゑる（2）、いずらゑる（3）、ゑぜきゑる（3）、こんしゑんしや（55）、さぴゑんしや（4）、のゑ（1）（計68）	89
計	21	202	223

※「ゑぜきゑる」3例は、語頭・語中語尾の両方に入れている。

〈『おらしよの翻訳』〉

	「え」を含む語	「ゑ」を含む語	計
語頭	（ナシ）	ゑうかりすちや（4）、ゑけれじや（7）、ゑすてれまうんさん（1）、ゑすぺらんさ（1）、ゑは（1）、ゑんてんぢめんと（1）（計13）	13
語中語尾	（ナシ）	さぴゑんしや（1）、しゑんしや（1）、ぱしゑんしや（1）、ぴゑたで（1）、らはゑる（1）（計5）	5
計	0	18	18

〈『こんてむつすむん地』〉

	「え」を含む語	「ゑ」を含む語	計
語頭	（ナシ）	ゑうかりすちや(21)、ゑけれじや(1)、ゑはんぜりよ(1)、ゑすきりつうら(2)(計25)	25
語中語尾	いずらえる(1)、こんしえんしや(6)(計7)	いずらゑる(1)、こんしゑんしや(5)、のゑ(1)(計7)	14
計	7	32	39

この調査から、「ゑ」が語中語尾に用いられている例がある点は後期版どちりなと異なっているが、五種類とも後期版どちりなと同様、本語の語頭に「え」を用いた例は全くなく、もっぱら「ゑ」が用いられていることが明らかになった。したがって、これら五種類の国字本においても、後期版どちりなとほぼ同じような「ゑ」の用法が見られることがわかった。

4.「え」「ゑ」の使い分けの背景

日本の平仮名資料において、語頭であるか語中語尾であるかの違いによって異体仮名文字の使い分けがなされていた文献があることは、諸先学の研究によって既に知られている。キリシタンの本語表記で、当時同音に対する異表記とみなされていた「え」「ゑ」の二文字が語頭・語中語尾で使い分けられていたことの背景には、このような平仮名資料で行われていた仮名文字の使い分けがあったと考えたい。

キリシタン版国字本の仮名文字遣について、キリシタン資料以外の国内文献の影響が見られることは、『落葉集』や『ぎやどぺかどる』巻末の「字集」について既に高羽（1951）、土井（1962）、山田（1971）、安田（1973）、小島（1978）などの指摘があり、近年今野（1995, 1996）の調査で『落葉集』の中でも特に「は」「わ」、「か」「た」「に」「へ」「み」について、国内文献と同様の仮名文字の使い分けが見られることが数値的に明らかにされている。また鄭（1998）は、部分的な調査ではあるが、前期版・後期版どちりな二本においていくつかの平仮名で語頭・非語頭の違いによって字体の使い分けが認められることを明らかにした。

新しく入ってきた語であるためにそれまで表記の規範がなかった本語に対して

も、国内文献で用いられていた仮名文字遣が影響を与えたのではないだろうか。

4．1　後期版どちりなの日本語における「え」「ゑ」

定家仮名遣のような伝統的な仮名遣を離れて、キリシタン版の本語表記と同様語頭では「え」でなく「ゑ」を用いる傾向がある日本の平仮名資料の存在はこれまでにいくつか報告されている。鎌倉時代の恵信尼文書について安田（1971）、室町時代初期に書かれた世阿弥自筆文書については表・後藤（1980）、豊臣秀吉自筆文書については安田（1967）、江戸時代初中期書写の大蔵流狂言台本虎清本・虎明本、大蔵虎明自筆本『わらんべ草』について菅原（1979）の指摘がある。

後期版どちりなにおいて、本語以外の日本語（以下、単に「日本語」と称する）を調査した結果、「え」「ゑ」の語頭・語中語尾の違いによる使い分けは見られなかった。

	「え」を含む語	「ゑ」を含む語	計
語頭	えき(1)、えらびとる(3)、えらびいだす(1)、えんまん(1)、う・える(3)、えん(3)(計12)	ゑ(1)、ゑい(4＋ルビ1)、ゑき(1)、ゑん(ルビ1)(計6＋ルビ2)	18(＋ルビ2)
語中語尾	うゆ・うえ(1)、こゝろえ(3)、こゝろう・こゝろえ(2)、こゆ・こえ(8)、たゆ・たえ(1)、もとめう・もとめえる(1)(計16)	ちゑ(9)、すゑ(1)(計10)	26
計	28	16(＋ルビ2)	44(＋ルビ2)

(1)「う・える（3)」は動詞「う（得)」の活用形「える」の例が3例あることを表す。
(2)「ゑい」は全て「御ゑい」の形で現れるが、「ゑ」は語頭とみなした。
(3) 一語一音節の語「ゑ」(絵) は語頭の例に入れた。

また本語の場合のように後期版への改訂で語頭の「え」を「ゑ」に改めたり、語中語尾の「ゑ」を「え」に改めた例はなく、逆に前期版で語頭が「ゑ」だったものを後期版で「え」に改めた例が3例ある[6)]。

ゑらびとつて（1v-ℓ.11）→えらびとりて（2-ℓ.1）

ゑん（70-ℓ.3，70v-ℓ.9）→えん（50-ℓ.4，50v-ℓ.3）

また、２．２．１で挙げた『落葉集』の「つくえ・つくゑ」「えだ／ゑだ」の例も、キリシタン版の日本語表記において「え」と「ゑ」を語頭・語中語尾で使い分けていなかったことを示している。

４．２　後期版どちりなのア音・マ音・ミ音の表記

先に見たように後期版どちりなの日本語では「え」「ゑ」の語の中の位置による使い分けは見られなかったが、この資料の本語表記において仮名文字遣に注意が払われていることは、ア音・マ音・ミ音の表記から確認することができる。

新井トシ（1958a, b）、鄭（1998）を参考にしながら筆者が調査したところによると、後期版どちりなの平仮名のうち複数の異体仮名があるのはア、カ、ク、ケ、コ、シ、ス、セ、ソ、タ、ツ、ニ、ハ、ヘ、ホ、マ、ミ、ヤ、ラ、リ、ル、レ、ワ、ヲである。このうち、本語について「あめん」「べあと」、「みいさ」「どみんご」のように語頭にも語中語尾にも現れる仮名、かつ、清濁・促音など発音の違いと仮名文字遣が関係している可能性がない、一文字に対して一音節が対応している仮名はア、マ、ミである。つまりア、マ、ミについては、本語の語頭・語中語尾両方に用いられた例があること、同音に対してそれぞれ「あ」（字母「安」、以下「あ」と表記）と「ゐ」（字母「阿」、以下「阿」と表記）、「ま」（字母「末」、以下「ま」）と「ゐ」（字母「満」、以下「満」）、「み」（字母「美」、以下「み」）と「ミ」（字母「三」、以下「ミ」）という異なる字母をもつ仮名文字があり、しかも二種類の表記の違いが発音の違いと無関係であることが、「え」「ゑ」と共通している。本語表記におけるア、マ、ミそれぞれの二字体の用例数は以下の通りであった。

	仮名文字	語頭	語中語尾	計
ア	あ（字母「安」）	40	6	46
	阿（字母「阿」）	48	92	140
	計	88	98	186

マ	ま（字母「末」）	123	17	140
	満（字母「満」）	4	47	51
	計	127	64	191

ミ	み（字母「美」）	22	1	23
	ミ（字母「三」）	19	10	29
	計	41	11	52

ア音については、「あ」が用いられているとき46例中40例が語頭であり「阿」は140例中92例が語頭以外であって、二文字の使い分けが見られる。これは、鎌倉時代末頃の成立と見られる二条派の歌論書『和歌大綱』の「かきたがへてあしかるべきかんなの事」に

下にかゝぬ阿　上下わかぬあ

と記されている仮名文字遣であり、菅原（1979）の調査により大蔵流狂言台本虎明本に見られる用法であることが明らかにされている。

マ音については、「ま」が用いられているとき140例中123例までが語頭、「満」は51例中47例が語頭以外であり、やはり二文字の使い分けが見られる。菅原（1979）によるとこの使い分けは大蔵流狂言虎明本にも見られるという。

ミ音については、「み」が用いられているとき23例中22例までが語頭であり、「み」は用いられるのは専ら語頭である。「ミ」は語頭19例、語頭以外10例であるので、「み」の用法を「ミ」が包摂しているということができる。「み」「ミ」は先に挙げた『和歌大綱』に

下にかゝぬみ　上下にわかぬミ

と記されている仮名文字遣で、このような使い分けは伊坂（1988）が藤原俊成自筆本『廣田社歌合』に、表・後藤（1980）が世阿弥自筆文書にも見られることを指摘している。また先にあげたように今野（1996）によって『落葉集』にもこれ

に類似した使い分けが見られることが明らかにされている。

このように、後期版どちりなの本語のア音・マ音・ミ音の表記では、いくつかの国内文献で見られる用法と同様の、位置による字体の使い分けが見られることがほぼ明らかとなった。したがって、エ音「え」「ゑ」の使い分けについても、このような仮名文字遣の手法が採り入れられた可能性が高いということができよう。

4．3　本語表記における「え」「ゑ」の使い分けについての考察

本語表記の「ゑ」のように、ある決まった字体をもっぱら語頭に用いる表記法は、伊坂（1988）の指摘する通り、意味単位の境界がどこにあるかを示すために有効な手段であった。キリシタン版の場合、ローマ字本ならば単語や文節ごとに分かち書きされているうえ、特に本語については語頭の文字を大文字にしているため、目で見てすぐ語の始まりがわかる。しかし国字本では、国内の平仮名資料と同様に文字がほとんど切れ目なく続き、ローマ字本よりも語の始まりが捉えにくい。さらに国字本の対象とされたと思われる日本人読者にとって本語はなじみが薄く、他の日本語と比べて直前の語との区切りを明示する必要性は大きかったと思われる。後期版どちりなにおいて本語では「え」「ゑ」の使い分けがあったのに、日本語には見られなかったのは、日本語に対してのみ当時通用していた既存の仮名遣が影響を与えたためとも考えられるが、日本語に比べて本語の方が、語の始まりを視覚的に明示することがより必要とされたためでもあろう。

その必要性は、キリシタン版に見られる次の二つの試みからも確認される。前期版どちりなでは、巻末に

くるすの下にあるべきことばはらちんの口と心得べし（79v）

とあって、本語の一部、特にあまり使用頻度の高くない用語の上にくるす（十字架）の印を付けて、「＋いであ」のように本語であることを明示している語が全ての本語の用例のうち約3.6％（53／1472）ある。また、『ぎやどぺかどる』では序に

此＊星の験の下は人の名也（上1v）

の断り書きがあり、本文中の人名は語の前に「＊」を付けているものが大半を占

める。これらはいずれも後期版どちりななど他の国字本では見られない方法であるが、「ゑ」の用法と同様に、本語を直前の語と区別して認識させるために考え出されたものであろう。

ポルトガル語やラテン語を日本語で表記する場合、表記の規範はそれ以前に存在しなかったため、キリシタンが新たに表記を定めることができた。言い方を換えれば、もともと本語の表記については、他の日本語ほど既存の仮名遣による束縛は強くなかった。しかし、本語の表記が新たな慣習・規範として確立していく過程で、語頭にある決まった仮名文字を用いるという、前の語との境界を明示するために有効な平仮名資料の手法を採り入れて成立したのが、本語表記特有の「え」「ゑ」の使い分けであったのではないだろうか。

5．本語表記の「い」「ゐ」・「お」「を」

どちりなの前期版から後期版への改訂で、本語の語頭の「ゐ」を「い」に、「を」を「お」に改めている例があることははじめにふれた。これも語頭の文字表記に関する改訂であるから、「え」「ゑ」との類似性が予想されうる。そこでここでは、「い」「ゐ」、「お」「を」の二組を取り上げ、「え」「ゑ」との共通点と相違点を考察する。そしてその比較から、改めて「え」「ゑ」の使い分けが本語の規範的な表記となった理由と必然性について考えたい。

5．1　改訂の様相

後期版どちりなにおける「い」「ゐ」、「お」「を」の改訂のそれぞれの用例を見ていく。

5．1．1　「い」「ゐ」の場合

〈語頭の「ゐ」→「い」……3例〉

ゐんへるの（35v-ℓ.10，39v-ℓ.1，39v-ℓ.10）→いんへるの（23v-ℓ.7，26-ℓ.1，26-ℓ.16）

この結果後期版では、語頭・語中語尾の両方とも本語表記に「ゐ」を用いた例は1例もなくなり、語頭に「い」を用いている用例数の割合は83.3％から100％

となっている。

		「い」を含む語	「ゐ」を含む語	計
前期版	語頭	いざべる(1)、いであ(5)、いにみしず(2)、いん(3)、いんひにと(2)、いんへるの(2)(計15)	ゐんへるの(3)	131
	語中語尾	あるちいご(24)、くはれいずま(2)、さきりひいしよ(4)、しいぬん(2)、じゆいぞ(3)、じゆすちいしや(3)、せんちいどす(3)、でうすひいりよ(2)、どちりいな(6)、ばうちいずも(3)、ばうちいぞ(1)、ひいです(29)、ひいりい(2)、ひいりよ(10)、へいとろ(1)、べねぢいた(1)、べねぢいと(1)、ぺるしいなる(1)、ほるたれいざ(1)、みいさ(12)、れじいな(2)(計113)		
後期版	語頭	いざべる(2)、いであ(5)、いん(3)、いんへるの(8)(計18)	(ナシ)	125
	語中語尾	あるちいご(1)、くはれいずま(1)、こんしいりよ(1)、じゆいぞ(4)、せんちいどす(2)、でい(1)、どちりいな(1)、ぱらいぞ(6)、ひいです(33)、ひいりい(3)、ひいりよ(8)、ぺいとろ(4)、みいさ(35)、れじいな(1)、ろざいろ(6)(計107)		
計		253	3	256

※「いてあ」と「いであ」のように原語が同じで「い」「ゐ」に関係のない表記のゆれは、用例数の多い方に表記に統一し用例数もひとつにまとめている。

5．1．2　「お」「を」の場合

〈語頭の「を」→「お」……13例〉

をすちや（をすちやす）（64v-ℓ.12，65-ℓ.1，65-ℓ.8，65v-ℓ.2，65v-ℓ.4，65v-ℓ.9，66-ℓ.5，66-ℓ.7，66-ℓ.9，66-ℓ.11，66v-ℓ.4，67-ℓ.4，67-ℓ.8）

→おすちや（45v-ℓ.12，45v-ℓ.14，46-ℓ.1，46-ℓ.6，46-ℓ.7，46-ℓ.11，46-ℓ.17，46v-ℓ.1，46v-ℓ.3，46v-ℓ.4，46v-ℓ.8，46v-ℓ.17，47-ℓ.3）

「を」に関しても「ゐ」と同様、後期版では本語表記に使用された例はなくなり、語頭では「お」を用いている用例数の割合は82.8％から100％になっている[7]。

5．2　音韻面からの考察

「ゐ」から「い」、「を」から「お」（「お」「於」二活字を含む）への改訂は、用例がそれぞれ「いんへるの」「おすちや」の一語ずつしかない。しかし、「え」「ゑ」の場合と同様に、日本語や原語における発音の違いが改訂に関係していたとは考えにくい。

まず日本語においては、院政期以降「い」「ゐ」、「お」「を」の発音は同音化していたと言われており、キリシタン資料でも「い」「ゐ」はi, j, y,「お」「を」はuo（vo）が等しく用いられ、ローマ字綴りに区別はない。

原語の発音については、用例は多くないものの、後期版ではアクセントの有無や母音の種類の違いとは無関係に、語頭・語中語尾とも全て「い」及び「お」の表記に統一したといってよいだろう。

※アクセントの位置・母音の種類が推定できるポルトガル語の例のみをあげた。「い」「お」には下線を引き、アクセントの位置は網掛けで示す。

〈アクセントのあるi〉

いんへるの、あるちいご、くはれいずま、こんしいりよ、せんちいどす、どちりいな、ぱらいぞ、ひいりよ、みいさ

〈アクセントのないi〉

じゆいぞ、ろざいろ

〈iの発音の種類〉

[i] あるちいご、こんしいりよ、せんちいどす、どちりいな、ぱらいぞ、ひいりよ、みいさ、ろざいろ

[ĩ] いんへるの

[ε] くはれいずま[8)]

〈アクセントのあるo〉

おすちや、おるでん、おれよ、おんたあで

〈アクセントのないo〉

おりじなる

〈oの発音の種類〉

［ɔ］　おすちや、おるでん、おれよ

［o］　おりじなる

［õ］　おんたあで

5．3　「え」「ゑ」と「い」「ゐ」・「お」「を」の共通点と相違点

「え」「ゑ」、「い」「ゐ」、「お」「を」の三組に関する改訂には、次のような共通点がある。

(A) ア行とワ行の同段の仮名の組み合わせである

(B) キリシタン資料ではローマ字綴りに区別がなく同音とみなされている

(C) 語頭であるか語中語尾であるかが改訂に関係している

しかし本語表記に関して、「え」「ゑ」と、「い」「ゐ」・「お」「を」の二組とには大きな違いがある。「え」「ゑ」については改訂後も二種類とも併用しつづけ、語頭と語中語尾での使い分けを明確にしているのに対して、後者の二組に関してはワ行の「ゐ」「を」を本語表記には全く用いなくなることである。「ゐ」「を」を用いなくなったことは、先に調査した五つの国字本でも同様であった。なぜ「ゐ」「を」はキリシタン版の本語表記に用いられなくなったのであろうか。

イ音の場合、語頭にイのくる本語が多くないことが一因と思われる。後期版どちりなにおいて、語頭にイのくる本語は4語18例、語中語尾に含むのは15語107例で、語中のイ段長音表記に用いられる例が多く、語頭の例は少ない。『ぎやどぺかどる』の場合も、語頭がイの語は9語128例、語中語尾にあるのは14語204例で[9]、やはり語頭に現れる例は語中語尾の例に比べてかなり少ない。したがって、語頭で前の語との区切りを示す必要性自体が小さく、語頭と語中語尾で文字を使い分けても効果が小さいとみなされたのではないだろうか。

オ音の場合は、イ音とは逆に、本語ではほとんど語頭にのみ現れる。オ段長音はふつう「ぷるがたうりよ」のように「う」のかなで表されることもあって、調査したキリシタン版国字本全体の本語の中で語中語尾に「お」（または「を」）が現れる例は、前期版どちりなの「おゝれよ」「をゝれよ」の「ゝ」以外にはなかった。したがってオについては、もっぱら語頭に現れるので、語中語尾に用いる

ための別の文字を必要としなかったことになる[10)]。

このように、その表記が語頭に立つ本語・語中語尾に現れる本語の両方が、ある程度の数存在するかどうが、「え」「ゑ」と「い」「ゐ」・「お」「を」の違いとなっていると思われる。言い換えれば、エ音の場合はイ音・オ音と異なり、語頭に立つ本語と語中語尾に現れる本語が両方ともかなりの数あった（例えば後期版どちりなでは語頭は6語9例、語中語尾は9語105例）ので、「え」「ゑ」二文字を語頭・語中語尾で使い分けることに効果があるとみなされ、規範的な表記として定着したと考えることができる。

6．まとめ

キリシタン版国字本の本語表記において、エ音には語頭ではもっぱら「ゑ」を用い、「え」は避けられる傾向がある。これは前期版どちりなから後期版どちりなへの改訂で明確になっている方針であるが、他の国字本でもほぼ同様の傾向が見られる。

この「え」「ゑ」の使い分けは日本語や原語の音韻の違いを表したものではなく、当時の日本に伝統的に存在していた、語頭と語中語尾で仮名文字を使い分ける仮名文字遣の影響を受けて成立したものとみられる。後期版どちりなの本語において、ア音・マ音・ミ音について、ある字体がほぼ語頭にのみ限定されて用いられる他の多くの平仮名資料と類似した用法が見られた。この使い分けから、仮名文字遣が本語の表記に対しても大きな影響を与えていたことが推測される。したがって、本語表記における「え」「ゑ」の用法は、日本人がまだ見慣れない本語に対して、直前の語との区切りを視覚的に明らかにし理解を助けることを意図して、仮名文字遣の手法を採り入れ、本語表記の新たな規範として定着させていったものといえるだろう。

「え」「ゑ」の関係に類似したものとして「い」「ゐ」と「お」「を」がある。この二組については、どちりなの前期版から後期版の改訂に見られるように、「ゐ」「を」は本語表記に用いられなくなり、もっぱら「い」と「お」（活字は「お」「於」の二種類）だけが使われるようになった。この理由は、本語の語頭にも語中語尾にも多く現れるエ音とは違って、イ音については語頭に現れるような

本語が少ないため、またオ音については逆にもっぱら語頭にのみ現れるため、二種類の文字を使い分けても区切りの役割を果たさなかったためであろう。逆にいえば、エ音の場合は本語の語頭・語中語尾のどちらにも多く現れるからこそ、「え」「ゑ」の二種類を使い分ける用法が効果的であるとみなされ、本語表記の規範として定着したものと考えられる。

注

1）『ぎやどぺかどる』（1599年刊）、『おらしよの翻訳』（1600年刊）、『どちりなきりしたん』（1600年刊）、『こんてむつすむん地』（1610年刊）などでは、「でうす」「きりしと」「ぜずゝ」「ぜずきりしと」についてはそれぞれ「ᵈᵉ」「ᵉ」「ᵒ」「ᵉᵉ」のローマ字合体略字符号の活字を用いている。

2）本によっては字母「衣」の「え」に対して二種類の異なる活字が用いられているが、本稿では「え」と「ゑ」の使用について論じるためこの二種類の「え」については特に区別しない。

3）馬淵（1971: 57-60）、『国語学研究事典』明治書院（1977: 239）「ワ行音」の項（松本宙執筆）などによる。

4）現代のヨーロッパのポルトガル語の発音は António de Morais Silva, *Grande Dictionário da Lingua Poutuguesa,* Lisboa, 1949-59, 10ᵃed に、ブラジルポルトガル語の発音は、池上岑夫・金七紀男・高橋都彦・富野幹雄共編『現代ポルトガル語辞典』（白水社、1996年初版）によった。現代のブラジルとポルトガルにおける発音の違いは、本稿で扱う内容については特に問題になるものはないとみられる。

5）「がびりゑる」の1例は、後期版において唯一語中に「ゑ」が用いられている例外的な用例なので、ここであげるのは適当でないかもしれないが他に適当な例は見当らなかった。

6）参考として、前期版どちりなの日本語の「え」「ゑ」の使用例とその数をあげておく。語頭・語中語尾での明確な使い分けは見られないことは後期版と同様である。

	「え」を含む語	「ゑ」を含む語	計
語頭	えらびとる（1）、えらび出だす（1）、えらびだす（1）（計3）	ゑい（2）、ゑかう（1）、ゑき（1）、ゑらびとる（1）、ゑん（3）（計8）	11
語中語尾	かるがゆえに（1）、こゝろう・こゝろえ（1）、こゆ・こえ（1）、見えヱふ（1）、わきまふ・わきまえ（1）（計5）	いゑ（8）、ちゑ（6）、すゑ（1）（計15）	20
計	8	23	31

7）なお、「お」については「お」「於」二種類の活字が使用されている。「お」「於」の使い分けは、特に後期版の場合「おすちや」「於らしよ」のように単語ごとにほぼ決まっており、語ごとに同じ活字の組をくりかえし用いたようである。

	「お」を含む語	「を」を含む語	計
前期版	おゝれよ(お2)、おすちや(お1)、おびりがさん(お4)、おらしよ(お49，於4)、おりじなる(お1)、おるでん(お3，於1)、おれよ(お1)、おんたあで(お6)(計72 お67＋於5)	をすちや(13)、をゝれよ(1)、をんたあで(1)(計15)	87
後期版	おすちや(お13，於1)、おらしよ(於58)、おりじなる(お1)、おりべて(於1)、おるでん(お1，於3)、おれよ(お1)、おんたあで(お2)(計81　お18＋於63)	(ナシ)	81
計	153	15	168

8）現代ブラジルポルトガル語でquaresmaの発音は[kwa'rɛzma]である。「くはれいずま」の表記は、エ段長音を「れい」で表しているのであろう。

9）「いざいやす」のように語頭・語中の両方に「い」を用いている語は、語頭・語中語尾の両方に入れて数えた。

※「おんたあて」「おんたあで」「おんたで」のように、原語が同じで「お」「を」に関係のない表記のゆれは、用例数の多い表記に統一し、用例数もひとつにまとめた。

10）本語表記で「ゐ」「を」を廃して「い」「お」が選ばれたのは、日本の平仮名資料の影響があった可能性がある。「い」「ゐ」については、恵信尼文書では語頭に「ゐ」を用いる傾向があり、豊臣秀吉自筆文書では語中語尾には「ゐ」でなく「い」を用いていることが安田（1971）（1967）にそれぞれ指摘がある。本語表記の場合イ音は語中語尾に現れることが多いので、このような日本の慣習的な仮名遣に倣い、語頭に用いられる傾向のあった「ゐ」を廃して「い」を用いるようにしたのかもしれない。

また「お」「を」については、先にあげた恵信尼文書、世阿弥自筆文書、豊臣秀吉自筆文書、大蔵流狂言虎清本・虎明本、大蔵虎明自筆『わらんべ草』で、語頭には「お」（または「於」）を用い、語中語尾には「を」を用いる傾向があることが指摘されている。本語表記においてオ音はほぼ常に語頭に現れるので、「を」ではなく「お」「於」が選択されたことは、上のような語頭に「お」を用いる傾向のある国内文献の影響があった可能性がある。

参考文献

新井トシ（1958a, b）「きりしたん版國字本の印行について（二）・（三）」『ビブリア』10,

12
池上岑夫（1984）『ポルトガル語とガリシア語――その成立と展開――』大学書林
伊坂淳一（1988）「藤原俊成の用字法・試論」『学苑』577
大塚光信（1954）「本語小考」――同著『抄物きりしたん資料私注』清文堂出版（1996）所収（初出『国語国文』23-6）
表章・後藤ゆう子（1980）「世阿弥の平仮名書の用字法の特色（上）（下）」『能楽研究』5, 6
亀井孝・H.チースリク・小島幸枝（1983）『日本イエズス会版キリシタン要理』岩波書店
小島幸枝（1978）『耶蘇会版落葉集総索引』笠間書院
今野真二（1995）「仮名文字遣からみた『落葉集』――「は」「わ」の場合――」『国文学研究』25
今野真二（1996）「『落葉集』の仮名文字遣について――「か」「た」「に」「へ」「み」に関して――」『国語文字史の研究』3
菅原範夫（1979）「大蔵流狂言資料に見られる平仮名用字法の諸相」――同著『キリシタン資料を視点とする中世国語の研究』武蔵野書院（2000）所収（初出『高知大学学術研究報告　人文科学』28）
高羽五郎（1951）『ぎやどぺかどる字集　索引』国語学資料第六輯
土井忠生（1962）「落葉集解題」――同著『吉利支丹語学の研究新版』三省堂（1971）所収（初出　京都大学文学部国語学国文学研究室編『慶長三年耶蘇会版落葉集』）
馬淵和夫（1971）『国語音韻論』笠間書院
安田章（1967）「仮名資料序」『論究日本文学』29
安田章（1971）「仮名文字遣序」『国語国文』40-2
安田章（1973）「吉利支丹仮字遣」『国語国文』42-9
山田俊雄（1971）「落葉集小玉篇に見える漢字字体認識の一端」『国語学』84
鄭炫赫（1998）「キリシタン文献の平仮名の用字法――国字本『どちりなきりしたん』を中心に――」

本稿で利用したキリシタン版の影印・索引類は以下の通りである。

・『どちりいなきりしたん』（1591年？刊）（前期版国字本）
　『どちりいなきりしたん（バチカン本）』勉誠社文庫（1979）
　（ヴァチカン図書館蔵本の影印）
・『ドチリナ・キリシタン』（1592年刊）（前期版ローマ字本）
　橋本進吉『キリシタン教義の研究　別冊』橋本進吉博士著作集第十一冊

岩波書店（1983）（東洋文庫蔵本の影印）
・『どちりなきりしたん』（1600年刊）（後期版ローマ字本・国字本）
小島幸枝編『どちりなきりしたん総索引』風間書房（1971）
（ローマ字本・水戸彰考館蔵本、国字本・カサナテンセ図書館蔵本の影印）
・『ばうちずもの授けやう』（1592年？刊）
『きりしたん版集一』天理図書館善本叢書　天理大学出版部（1976）
林重雄編『ばうちずもの授けやう・おらしよの翻訳　本文及び総索引』
笠間書院（1981）
・『サルバトル・ムンヂ』（1598年刊）
『南欧所在吉利支丹版集録』6 雄松堂書店（1978）
（カサナテンセ図書館蔵本の影印）
松岡洸司「慶長三年耶蘇会版サルバトル・ムンヂの本文と索引」
『上智大学国文学論集』6（1973）
・『落葉集』（1598年刊）
小島幸枝編『耶蘇会版落葉集総索引』笠間書院（1978）
（イエズス会本部蔵本の影印）
・『ぎやどぺかどる』（1599年刊）
『きりしたん版集一』天理図書館善本叢書　天理大学出版部（1976）
豊島正之編『キリシタン版ぎやどぺかどる　本文・索引』清文堂（1987）
・『こんてむつすむん地』（1610年刊）
『きりしたん版集一』天理図書館善本叢書　天理大学出版部（1976）
近藤政美編『こんてむつすむん地総索引』笠間書院（1977）

本稿は、平成十一年十一月京都大学国文学会（於京都大学）における口頭発表「キリシタン版国字本の本語表記から」をもとに、大幅に加筆・修正したものである。発表後有益なご教示を頂いた多くの先生方に心より御礼申し上げる。

〈キーワード〉キリシタン版国字本，本語，仮名文字遣，『どちりなきりしたん』，外来語の表記

The Usage of え and ゑ in Words of Western Origin in Publications of the Jesuit Mission Written in Japanese Letters

Emi KISHIMOTO

Within the publications of the Jesuit Mission written in Japanese letters, words borrowed from Western languages (mainly Portuguese and Latin) are transliterated in the Hiragana syllabary.

To express the simple vowel /e/(that is, not proceeded by a consonant), the authors used two kinds of Hiragana,え and ゑ. ゑ was usually chosen as initial letter of a word, and え as non-initial. The fact can be clearly understood from the corrections in notations which can be seen in the two editions of "Doctrina Christam" written in Japanese letters, respectively "どちりいなきりしたん", published probably in 1591, and "どちりなきりしたん", published in 1600.

This usage does not seem to express differences of pronunciation of the simple vowel /e/ in Japanese or in the original languages. Actually, in those days in Japan, there was a traditional usage that among homophone Hiragana letters certain ones were regularly selected as initials, most likely in order to suggest the beginning of a word (as in the Japanese writing, words are not divided by spaces). In the edition of "どちりなきりしたん" printed in 1600, a similar state of facts may be observed with regard of other Hiragana syllabary letters, such as /a/, /ma/ and /mi/. Therefore, it can be inferred that the usage of え and ゑ in words of Western origin was also influenced by this aspect of the orthography of Japanese Hiragana.

The relations of い versus ゐ, respectively お versus を in transliterating Western words are similar to that of え and ゑ, but in later texts ゐ and を ceased to be used. This fact is probably due to the lack of effectiveness of using differently initials and non-initials with regard of those two pairs, since there were few foreign words which had /i/ or /o/ in both the positions of initial and non-initial, particularly /i/ as initial or /o/ as un-initial.